

【田中ビネー知能検査Ⅴ】 事例を用いた 検査結果の分析

令和7年（2025年）1月14日（火） 14:00～16:20
北海道立特別支援教育センター
教育課主査（知的障がい教育室長）岡 森 博 宣
研究員（視覚障がい教育室）山 田 剛 弥

北海道立特別支援教育センターの山田です。

この時間は、ここまでの学びを踏まえ、事例を用いた検査結果の分析と協議
を行いながら、本検査について理解を深めていただきます。

よろしくお願いいたします。

流れ

14:00 演習の進め方

14:05 事例①

15:05 事例②

16:05 全体交流

16:15 まとめ

16:20 終了

< 1 事例60分 >

- ・ 事例の説明 5分
- ・ 検査結果の分析
～支援の検討 35分
- ・ 協議 15分
- ・ 事例のまとめ 5分

2

この時間の流れです。

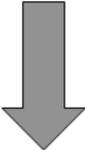
初めに演習の進め方について説明し、その後結果の読み取りを含めた事例検討を2本行います。

事例1本当たりの時間は60分で行い、その内訳はスライドの右側をご確認ください。

事例検討の後は、全体交流の時間を行い、集合から1名、遠隔から1名、演習をしてみたの感想を発表いただきます。

最後にまとめをして終わります。

事例検討シート

- ①② 保護者からの聞き取りや検査の結果を分析する。
 - ③ 支援の内容を考え、記入する。
(①～③で35分)
- 
- ④ ペアで協議する
(15分)

事例検討シート	
①子供の状況	
	
③どのように支援するか	
	
②検査結果から	
※検査時の様子から	
④協議で参考になったこと	

3

この時間に使う「事例検討シート」について説明します。

はじめに、対象となる子供の状況について、①の聞き取りから得られた情報や②の検査の結果、検査時の様子などから得られた情報を整理、分析し、③の支援の内容を考えます。

①～③までを35分で行います。

検査結果については、集合の方は、お手元に記録用紙のコピーを配付しています。

なお、生活年齢や基底年齢、精神年齢などは空欄にしていますので、それぞれ算出し解釈に活かしてください。

こちらの記録用紙と事例シートについては、本講義終了後に回収させていただきます。

その後、お隣の方と（遠隔の方はランダムな2人ペアで）どのような分析をして、どのような支援を考えたかについて交流し、支援の方向性について協議していただきます。

これを15分間で行います。

1 事例検討

4

ここからは、実際の事例のデータを基に、事例検討を行います。

事例①－1 新就学 女児Aさん

【保護者からの聞き取り】

- 3歳児検診の際、かんしゃくがあったり、言葉の発達が遅かったりしたことが気になり、定期的に通園センターを利用するようになった。
- 昨年までは、大人の些細な指導にも泣くことがあったが、今年度になって、泣くことは少なくなってきた。ただ、家でかんしゃくを起こしたり、泣き叫んだりすることがあることから、幼稚園では我慢していると母親は考えている。
- 家で気持ちを発散することに対して、保護者は寛容な気持ちで接している。(家で発散して気持ちが落ち着くのであれば、それでよい。)
- 幼稚園での友達とのトラブルは今年になり減ってきた。
- 幼稚園では、先生の指示が分からないことがあるようだが、周りの友達が何をすればよいのか教えてくれている。
- 小学校に入学して、友達が助けてくれることが減ったときに、学校が嫌になって不登校になってしまわないかが不安である。
- 幼稚園では、1クラス15名であるのに対し、小学校では、35名学級になる予定であるため、環境の変化についていけるのかも心配である。

5

最初の事例として扱うのは、当センターが実際に教育相談を行った、就学前の女の子です。

(保護者から聞き取った内容について説明する。)

事例①－2

【行動観察から】

- 口数は少ないが、日常会話への応答はスムーズである。
- 表情や行動の様子からは、特に不安は見られず、相談担当者が話し掛けると笑顔が見られた。
- 相談担当者との会話の中で、自転車の話になり、「補助輪…小さいタイヤはなくても乗れるの？」と聞いたところ、何のことか分からなかったようで、無言だった。
- 分からないことを無言でやり過ごしていると感じられる場面がいくつか見られた。

6

(行動観察から見られた様子について説明する。)

それでは、この事例について、聞き取りから得られた情報や検査結果、検査時の様子などを基に、どのように支援をするとよいか考えていきます。

配付している記録用紙にも、行動観察の記録や備考欄などに子供の特徴がありますし、各検査の回答なども参考にしながら、この子にどのようなつまづきがあって、どういった支援が有効と考えられるかについて考えたいと思います。

それでは、ここから35分間で分析と支援策をシートに記入してください。

①生活年齢 5歳6か月（66か月）

②基底年齢 3歳（2歳+1）

③加算月数

3歳 11(問)×1か月=11か月
4～6歳10(問)×2か月=20か月
=31か月

④精神年齢

3歳 + 31か月 → 5歳7か月（67か月）

⑤IQ

$67 \div 66 \times 100 = 101.5 \rightarrow 102$

7

【配付しません】

本事例の各年齢の算出はこのようになります。

正確な解釈につなげるためにも、各年齢の算出方法について熟知しておくことが必要です。

参考

○ 助言内容

【言葉の力を育てるために】

- ・遊びや手伝いを通して、本幼児の分かる言葉で言い換えたり、言葉と物、動作を結び付けたりすることにより、言葉の意味理解を促すようにすることにより、楽しみながら知っている言葉を増やすようにする。

【分かりやすく学ぶために】

- ・課題を説明するときは、視覚的な情報やモデルを見せるなど、本幼児が理解しやすくなる工夫を行うようにする。

【意欲を高めるために】

- ・本幼児が喜ぶ褒め方を工夫し、自分の得意なことやよさに気付かせたり、自信がもてるように励ましたりすることにより、活動への意欲を促すようにする。

【その他】

- ・個別の教育支援計画を作成することにより、本幼児の実態や指導目標などについて、関係者が共通理解を図り、一貫した支援内容を引き継げるようにする。

8

【配付しません】

参考として、当センターが保護者に伝えた内容を紹介します。

保護者からの聞き取りでは、言葉の遅れが気になることや幼稚園で、先生の指示が分からないことがあるとありました。（※問題42や52の回答の様子と合わせ、19や31など、低い年齢級の問題において特徴が見られることを伝える）

このように、言葉のみで説明を聞いたり回答したりする問題では、問われている意味や回答に適した言葉が分からずに、うまく表現できなったり、正対した回答にならなかつたりする様子が見られたこと。行動観察でも、日常会話は問題ないが、補助輪の間に無言だったことなどの情報から、言葉の力を育てるために、遊びや手伝いを通して、本幼児の分かる言葉で言い換えたり、言葉、物、動作を結び付けたりすることにより、言葉の意味理解を促すようにし、楽しみながら知っている言葉を増やすようにするのが良いのではないかと考えました。

また、本幼児が分かりやすく学ぶために、理解しやすくなる工夫が大切だと考えました。この幼児の強みを活かすとすると（43や46、47など根拠となる回答の様子を伝える）このように、絵を見て答える検査は合格していることから、課題を説明するときは、視覚的な情報やモデルを見せるなど、本幼児が理解しやすくなる工夫を行うようにすることを助言しています。

保護者は、本幼児が小学校入学後に、先生の指示が分からないことで自信を無くし、学校が嫌になってしまうのではないかと心配していました。

検査の様子では、問いに対してうまく答えられない場合でも、思った言葉を答えるなど、あきらめずに取り組む様子や1時間半と長い検査においても意欲的だったこと、道具の操作はゆっくりですがどの問題も丁寧に取り組んでいたことなど、たくさんの良い面が見られました。就学後も意欲的に学んでいけるように、本幼児が喜ぶ褒め方を工夫し、自分の得意なことやよさに気付かせたり、自信がもてるように励ましたりすることにより、活動への意欲を促すようにすることを助言しています。

本幼児の実態や指導目標などについて、関係者が共通理解を図るために、個別の教育支援計画を作成し、一貫した支援を引き継ぐことも大切だと考えます。

事例②－1 小学校第6学年 男子Bさん

【保護者からの聞き取り】

- 漢字の読み書きが苦手であり、読み書きともに低学年程度の理解であるため、振り仮名のない文章は、読んで理解することが難しい。
- 理科や社会が得意であり、テストでは80点～90点を取ることができている。振り仮名があれば自分で読んで解答しているが、漢字の理解の程度を考えると、図や写真から読み取って理解しているのではないかと母親は考えている。
- 国語は30点程度で、漢字のテストは10点程度であることが多い。
- 板書は十分に書ききれずに終わることがほとんどであり、平仮名が中心で文字も乱雑である。
- 文字の読み書きが苦手だが、学校が好きで休みたいと思ったことはない。友達関係も良好で、周囲から好かれている。
- 低学年から週に1回通級による指導を利用し、視覚認知のトレーニングなどを行っている。
- プログラミングに興味があり、タブレットを活用したり、音声入力やGoogleレンズで読めない文字を認識させるなど、ICTを自ら活用している。

9

次の事例も、当センターが実際に教育相談を行った、小学校第6学年の男子児童Bさんです。

(保護者から聞き取った内容について説明する。)

事例②－２

【行動観察から】

- 対面時は緊張した様子が見られたが、学校の様子などを話す中で緊張がほぐれ、相談員と楽しそうに学校の様子を話していた。
- 検査開始前に自分の名前を漢字で書いてもらおうと、苗字は漢字で書くことができたが、名前は途中までしか書くことができなかった。学校で名前を書く際には、いつも苗字のみ漢字で書き、名前は平仮名で書いていると言っていた。
- 検査後に、タブレットを使ってプログラミングに取り組んだ。普段使っているプログラミングソフトを自ら音声入力を用いて、サイト検索を行うことができた。
- 所員が紹介したプログラミングソフトにも興味を示し、試行錯誤しながらも楽しそうに取り組んでいた。小学校中学年程度の漢字が出てきたときには、漢字が読めず、内容を理解できていない様子が見られたが、操作する中で意味を想像しながら取り組んでいる様子が見られた。

10

(行動観察から見られた様子について説明する。)

それでは、この事例について、聞き取りから得られた情報や検査結果、検査時の様子などを基に、どのように支援をするとよいか考えてください。

時間は35分間です。

①生活年齢 11歳7か月（139か月）

②基底年齢 7歳（6歳+1）

③加算月数 7～11歳18_(問)×2_{か月}
=36か月

④精神年齢

7歳 + 36か月 → 10歳0か月
(120か月)

⑤IQ

$120 \div 139 \times 100 = \rightarrow 86.3$ 86

11

【配付しません】

参考

○ 助言内容

【分かりやすく学ぶために】

- ・本児童が学びやすくなるよう、漢字に振り仮名を付けるとともに、必要に応じて問題文を読み上げたり、タブレットやデジタル教科書等、ICT機器を活用して学ぶことについて検討したりするようにする。

【基礎学力の維持のために】

- ・学習内容に満足感や達成感を感じられるよう、本児童の興味・関心に応じた課題を提示したり、学んだことを具体的な場面で活用する機会を設けたりしながら基礎的・基本的な学習内容の定着を図るようにする。

【漢字を読み書きする力を高めるために】

- ・身近な出来事と関連付けながら漢字を覚えたり、「へん」の意味を考えながら部首を組み合わせて漢字を覚えたりするなど、できるだけ書く負担を軽減しながら、本児童にとって理解しやすい学び方を見つけるようにする。

【意欲を高めるために】

- ・学習の仕方や手順について、事前に本児童と確認することにより、見通しをもって取り組めるようにするとともに、有効なものについての理解を深め積極的に活用するようにする。

12

【配付しません】

参考として、当センターが保護者に伝えた内容を紹介します。

【研究員】

- ・検査が長時間に渡り、疲れた様子が見られたため、二度の休憩をはさんで実施した。
- ・どの課題にも真剣に取り組む、回答方法がわからないときには、自ら質問することができた
- ・田中ビネー知能検査Vについて、番号83の「木偏・人偏のつく漢字」や番号68・76・82・87の「数的思考（B～E）」では、「難しい」とつぶやきながら回答しており、回答後も自身が無く、正誤を気にする様子が見られた。
- ・番号70の「図形の記憶（A）」では、記憶した図形を短時間で正確に書くことができた。
- ・番号74の「話の記憶（A）」では、聞き取った内容を正確に覚えており、③のプログラムは提示した順に5種目すべて回答することができた。
- ・番号75の「ボールさがし」では、必ず見つけようと慎重に線を引いていたが、同じところに何度も線を重ねて引く様子が見られた。隙間を埋めようとしていたが、制限時間が過ぎたため終了した。
- ・番号89の「語順の並び替え（B）」では、考えた末、「紙に書いて解いてみたい」と自分から提案し、回答していた。※所定用紙に添付

【分析】

- ・漢字の読み書きに困難があり、教科の学びが積み上がっていない。
 - ・漢字のテストは10点台だが、理科や社会では支援なしで80点程度の点数が取れている。
 - ・学習に対する苦手意識が強くなっていることから、ICT機器の活用など、読み書きの負担を軽減し、当該児童の学びにつながる方法を検討する必要がある。
 - ・問題文の読み上げにより、内容を理解して答えられていることから、当該児童が自分に合った学習の仕方を身に付け、必要に応じて支援を求めていけるようにする必要がある。
 - ・興味のもてることに対し、意欲が高い。
 - ・IQは86であり、知的発達の遅れは見られない。
 - ・61の短文の復唱のように細部まで正確に覚えることは難しいが、71や84の話の不無理では、担当者の説明から内容を理解して正しく答えることができた。また、イメージが持てる運動会の種目については、順番まで正確に記憶して答えることができた。
 - ・83の木へんや人へんのつく漢字では、漢字を想起できず、誤答であった。また、1分30秒で書いた漢字は4～5つであり、正しく書けている漢字は一つのみであった。

2 まとめ

13

最後に、まとめを行います。

発達の状態を捉え支援につなげる

- 田中ビネー知能検査は、単に「知能が進んでいる」とか「遅れている」と評価を下すためだけにあるのではない。
- ひとりひとりの発達の状態を詳細に捉え、今後どうしたらいいかの指針を得るための有効な情報を与えてくれる。
- 子どもの発達にかかわる多くの人が、この検査を活用し、子どもの発達促進に役立てていただきたい。

「田中ビネー知能検査Ⅴ理論マニュアル」（田研出版）

14

長い時間お疲れ様でした。

本コースでは、田中ビネー知能検査Ⅴを用いて、演習や事例検討に取り組んでいただきました。

検査結果の解釈は、その内容が相談相手に正しく伝わって、子供たちの指導に役立てられてはじめて、その価値が発揮されます。

そのためには、検査で得られた情報を十分に検討するということと、相談相手の立場や専門性を考え、正確に分かりやすく伝えることが重要です。

多くの場合、子供たちを支援するのは、アセスメントの専門家ではなく、保護者や教師など、子供の周囲にいる方ですので、支援する方々が「よしやってみよう」とか、「それならできる」、「なるほどねそうやればいいのか」と思えるような実行可能な支援が提案できて、はじめて検査結果の解釈が子供たちの支援に活かされます。